

訳者おわりに

初めて手がけた翻訳書である『対応分析入門』（2015、オーム社）の出版を大隅昇先生に報告した際、次は、大学院生向けにこれを翻訳したらどうかと提案いただいたのが、本書である。

本書の第2版は、『対応分析入門』を翻訳する過程でも参照していたが、すべてを読んでいただけではなかったので、自ら翻訳するといった考えはなかった。大隅先生にはそのきっかけをいただいたこと、また折に触れ、翻訳中にご声援をいただいたことに感謝申し上げます。

次は出版社であるが、「これを訳したい」とオーム社の担当に相談すると、すぐに第3版が発行されるとの情報を得て、版權の確保にご尽力いただいた。これが2016年のことであった。

しかしながら予想通り、作業はかなりの重労働。途中、2019年にはCARME（対応分析と関連技法に関する国際会議）2019ケープタウン大会があり、それに間に合わせて発行できればなどと夢想したこともあったのだが、とてもとても間に合う状態ではなかった。ただ、下訳は終わっていたので、CARMEの会場で会議の合間を縫い、Greenacre先生本人に翻訳上の相談にのっていただけたのは幸いであった。それでも、作業はなかなか進まず、編集相当には心配をかけ続けていた。

そうこうしている間に、定年退職。専任教員としての講義の準備や会議、校務から解放され、何とか翻訳作業に集中することが可能になり、本書刊行に辿りつけた。正直、ほっとしている。

本書を手にする人には、多重対応分析（MCA）の社会学への応用に関心がある人も多いと思う。その意味では、オーム社から訳書刊行が予定されている、「Brigitte LeRoux, Henry Rounet (2010) “Multiple Correspondence Analysis”, SAGE Publications, Inc」との関係にも触れておきたい。こちらは、タイトルこそMCA（多重対応分析）であるが、Le Roux先生たちによるGDA（幾何学的データ解析）の実践的テキストである。

Le Roux先生は、ブルデューやトニーベネットの研究のデータ分析の中心を担ってきた方である。その意味では、このMCA本はMCAを文字通り社会学に適用するためのテキストになっている。このSAGEの本の大元は、本書の付録D

きっかけ

対応分析の基本文献

にも紹介されている、Le Roux, B. & Rouanet, H. (2004) “Geometric Data Analysis: From Correspondence Analysis to Structured Data.”である。しかし、Greenacreもこの付録でコメントしているが、この大著での数理的な記法が標準的な行列記法ではないため（ベンゼクリ学派の記法）「理解が制限される」のである。それに対しSAGEの本はそうした数理的な部分に深入りすることなく作られている。しかし、その分、利用するソフトウェア（SPAD）に依存した部分が増えてしまっているように思う。なお、この中で、MCAの発展形として、2つのバリエーションが紹介されている。Specific MCA (SpeMCA) と Class Specific Analysis (CSA) である (p61)。前者は、データ行列の特定の変数 (列) に注目したMCAであり、後者は、個体 (行) のサブ・クラウドに注目する分析である。本書の第21章で扱われている「サブセットMCA」が両者に対応している。

この2冊を比べて見ると、本書は、CA/MCAの基礎的な領域をカバーしており、その上に、各領域ごとの深化が行われると考えればよいことがわかる。本書でいえば、生態学やテキスト分析などであり、ここにある、社会学への応用ということである。「訳者はじめに」でも書いたが、そうした意味で、本書は、対応分析の基本文献であると言ってよいだろう。

謝辞

前翻訳書がご縁となって、多くの研究者との出会いがあった。この翻訳は、この前訳書によって開かれた関係のもとに実現している。特に以下の方々のお世話になった。

磯直樹先生（文化社会学、ブルデュー研究、日本学術振興会・慶應義塾大学）には、本書の翻訳作業の過程で、とくに多重対応分析についての勉強会にお付き合いいただいた。実践的な研究が求める理論的な理解という切り口で、いくつもの質問をいただいた。内田瑛先生（教育工学、中央学院大学）には、数学上の概念の確認で大いに助けていただいた。東北学院大学の片瀬一男先生には、『対応分析入門』をもとにした研究会を開いていただき、そこにご参加された同大学の鈴木勉先生（社会学、ネットワーク分析）には、ネットワークの対応分析についての本書第25章に訳語の対応などでアドバイスを頂戴した。また、前訳書でもいろいろなアドバイスをいただいたインサイトファクトリーの小野滋氏には、安定性と推定、並び替え検定の章についてのコメントいただいている。

CARME2015 ナポリ大会で私が発表した部会の座長をつとめていただいたオーストラリア NewCastle 大学の Eric Beh 先生は、対応分析の展開についての著作をお持ちで（本書付録Dの「その他の書籍」に紹介されている。Beh, E. & Lombardo, R (2015)。ここには33種類ものCAファミリーが紹介されている）この手法の広がりについての質問に答えていただき、2019年のケープタウン大会での発表内容についても相談にのっていただいた。また、ケープタウン大会でお会いしたニューヨークのFordham大学のSe-kang Kim先生には、本書でも扱われている「組成データ分析」（第22章）の実践例をいくつもお紹介

いただいている。さらに、ケープタウン大学のNatasha Karenyi先生（環境学）には、海洋生物種のデータベースの相談にのっていただいた。データセット6の「海底資料中の海洋種の存在量」に出てくる略号がどのような生物を指すのかを知ることができ、データへの理解が深まった。翻訳の中では直接記載していないが、サポートページでご紹介しようと思う。

もちろんいただいたコメント、アドバイスの真意を取り違えてる可能性もあり、内容的な責任は、すべて藤本にあることはいうまでもない。

Rに関しては、RのコミュニティであるTokyo.RでのLT（Lighting Talk）で発表させていただき、カテゴリカル・データの扱いや、なによりも対応分析/多重対応分析について報告させていただいた。その発表をきっかけにしてさまざまな意見をいただけたことに感謝する。

最後に今回の翻訳、出版もオーム社の藤沢圭介さんには大変お世話になった。また、組版は $\text{\LaTeX}$ で行われたが、GitHubをベースにした環境の構築からリモートでの $\text{\LaTeX}$ のコンパイルの実現環境の構築、最終段階では、索引のタグ付けを生成したPDFと連携して行うテクニックなど、今回もGreen Cherryの山本宗宏さんには相当な持ち出しになるであろうサポートを辛抱強くしていただいた。また、表紙のデザインは『対応分析入門』のデザインを担当していただいた、トップスタジオの轟木亜紀子さんに再度担当していただいた。素敵なカバーデザインとなった。こうした皆様にご支援いただき、本書を世に出すことができたこと、心より御礼申し上げる。

コロナ下で直接の往来が困難な状況が続いているが、次のCARME2023ポシ大会には、本書の翻訳をベースにした成果をもっていきたいと思っている。本書をきっかけにまた多くの方々との出会いがあることを楽しみにしている。

2020年10月

藤本 一男